

立教大学学術推進特別重点資金 (立教 S F R)

大学院学生研究

2015年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院	文学	研究科	英米文学	専攻
研究代表者 (2016年3月現在のものを記入)	在籍研究科・専攻・学年		氏名		
	文学研究科英米文学専攻3年		加藤惠梨香 印		
指導教員	所属・職名		氏名		
	英米文学専攻 教授		舌津智之 印		
自然・人文・社会の別	自然	<input type="checkbox"/> 人文	<input checked="" type="checkbox"/> 個人・共同の別	<input type="checkbox"/> 個人	共同名
研究課題	ホーソンと人種・作品に見る人種混淆の力学				
研究組織 (研究代表者・共同研究者) ※2016年3月現在のものを記入	在籍研究科・専攻・学年		氏名		
	文学研究科英米文学専攻3年		加藤惠梨香		
研究期間	2015 年度				
研究経費 (1円単位)	(支出金額) 200,000円 / (採択金額) 200,000円				

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、ナサニエル・ホーソン作品におけるアメリカ先住民表象を探るものである。特に1830年代アメリカにおいて、インディアンをめぐる言説がどのようなものであったかを、当時の雑誌や新聞記事をもとに検討し、作品との関連を考察した。また、ホーソンが実際に手にしていた18世紀の出版物、とりわけ植民地時代を扱った著作も分析の対象とし、作家の人種意識について検証を試みた。一次資料と歴史背景の入念な調査が本研究の特徴である。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[アメリカ先住民] [1830年代] [白人と先住民の戦争]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究では、ナサニエル・ホーソン作品におけるアメリカ先住民表象について検証した。特に、1830年代後半と、1840年代始めに執筆された短編を扱い、作家がいかにして当時の人種をめぐる政治的動向に意識的であったかを分析した。1830年にアンドリュー・ジャクソン大統領がインディアン強制移住法を施行すると、当時のアメリカ作家たちは、さまざまな形で白人と先住民の関係に言及していた。領土拡張を目的とする西漸運動にともない、白人が獲得しようとする土地にすでに居住しているインディアンたちを、文字通り強制的に移動させるのだが、これを先住民の保護として正当化する政府に対する非難や、この方法自体が暴力的であると見なす批判的なまなざしもあった。ホーソンは、ジャクソン大統領のインディアン政策について明言はしていないが、だからといって、同時代の人種をめぐる動向に無関心であったとは考え難い。多くの先行研究が指摘しているように、ホーソン作品に登場するアメリカ先住民は、野蛮・未開の部族という当時のステレオタイプを踏襲していると同時に、自然と一体化する美しさや威厳といったような、肯定的な特性も付与されているため、作家の先住民への態度は、両義的なものであると考えられている。しかし本研究では、直接的に描かれるインディアンのみならず、白人登場人物のうち、見受けられるアメリカ先住民表象について考察した。具体的には、“The Gray Champion”(1837)、“Endicott and the Red Cross”(1838)そして“The Birth-Mark”の三作品を扱った。

“The Gray Champion”は、17世紀マサチューセッツ植民地における、英米の対立を描いているが、ピューリタンと先住民の争いであるフィリップ王戦争への言及があるのは重要に思われる。母国と植民地の拮抗に、すくなくともピューリタンとインディアンの不和が関連していると考えられるからである。ホーソンがどのようにして歴史的背景を調べたのか特定することはできないが、実際手にした著作、例えば18世紀に出版された、Thomas Hutchinsonの植民地時代を扱った書物のなかに、フィリップ王戦争についての記述があるのは見逃すべきではない。ハッチンソンは、インディアン酋長のフィリップが、いかにして英国政府の打倒を遂行したか、そして彼が率いる一行が、イギリスにとって最も野蛮で、冷酷な敵であったか説明している。ここで描かれるインディアン族長と、ホーソンの描く白人キャラクターのグレイ・チャンピオンとのあいだに類似点が見受けられるのは興味深い。実際に、グレイ・チャンピオンは、イギリスから派遣されてきたEdmund Andros総督がその支配力を知らしめるために行った行進を妨げており、植民地の立場から、母国への反抗を示している。そして、英国に抵抗するグレイ・チャンピオンは、人物描写に注意を向けるとアメリカ先住民との共鳴も見取れる。こうして、アンドロス総督たちと、グレイ・チャンピオンの対立は、母国イギリスと、理想に燃えるピューリタンとの相克として単純化することはできない。同時に、チャンピオンが白人キャラクターであることにも再度目を向けると、母国対植民地の図式が、1830年代のアメリカにおける白人と先住民の対立として浮かびあがるように思われる。グレイ・チャンピオンは、アンドロス総督の行進に介入する際、“I am here, Sir Governor, because the cry of an oppressed people hath disturbed me in my secret place; and beseeching this favor earnestly of the Lord, it was vouchsafed me to appear once again on earth, in the good old cause of his Saints.”と発言している。「抑圧された人々」というのは、英国から植民地支配を受けるピューリタンの人々のみならず、その後時代を追って、同じアメリカで白人に土地を奪われ、迫害を受けるインディアンを暗示しているように思われる。アンドロス一行とグレイ・チャンピオンの相克には、母国イギリスの行進に組み込まれたアメリカの西部への歩みが、先住民の苦難の道のりへと連続していく様子を重ねることができる。このようにして、植民地時代における英米の対立が、19世紀アメリカで生じた、白人と先住民の相克として浮かび上がる可能性を明らかにした。

さらに本研究では、「ザ・グレイ・チャンピオン」と同様に、ピューリタン植民地の歴史を扱った“Endicott and the Red Cross”においても、ホーソンが白人登場人物のうちアメリカ先住民のイメージを付与していることを明らかにし、エンディコット総督が赤い十字を切り裂く行為を、白人とアメリカ先住民の関係の中で再解釈した。本作品は、植民地の統治を委任されているエンディコット総督が、英国王と大司教の権力がアメリカまで及ぶことを知らせる手紙を破り捨てる行為を描いている。そのため、批評的関心は、英国からの独立を試みるアメリカの精神性へと集まってきたが、本研究では、ピューリタンコミュニティのなかで、罰せられる白人や疎外される異教徒、そして植民地時代に先住民への布教を行ったJohn Eliotたちに焦点を当て、インディアン表象について検証した。ピューリタンの人々は、聖書に勝手な解釈を加えた男性を“Wanton Gospeller”として処罰し、法律に違反した女性には“A”の文字を付けることを課し、彼らを公衆の面前で罰する。このように懲罰されるのは、教会が定めた以外の聖書の解釈と信仰は認めないことを意味しているが、この罰を受ける男性は、異教徒と同様に、政党から外れる信仰を意味している。植民地時代にはジョン・エリオットがインディアンへの布教を行っていたように、異教徒に対して自分たちの信仰を正当として広める姿勢が強かったと考えられる。ホーソンは、本作品を執筆する際に、実在のエンディコット総督をモデルにしているが、彼が、アメリカ先住民を抑圧する運動を最初に開始し、彼らの大量虐殺を実施したことを踏まえると、ホーソンがそういった史実への言及を避けているのは重要である。なぜエンディコット総督のインディアンに

研究成果の概要 つづき

対する暴挙にふれなかったのかは、前述したピューリタンの残虐性と、総督が十字を引き裂く行為から考えることができる。本作品においてピューリタンの人々の不寛容さは、きわめて顕著であり、信仰心の深さとして単純化することはできず、彼らの罰則は残虐である。この残虐性は、白人が自分たちの対極に置き、「野蛮で未開」なインディアンのものとして認識している特質である。ホーソーンは、本作品に「野蛮で未開」なアメリカ先住民を登場させつつ、同時に白人キャラクターにも、そういった特徴を付与していると考えられる。こうして、白い布に付せられた赤い十字は、白人が、先住民に対して行った残虐行為、さらには彼らに対して背負った十字架として読み解ける。そして、ホーソーンがエンディコット総督のインディアンへの暴挙について説明を加えていないことを考慮に入れると、本作品には、先住民に対する迫害を忘却しようとする白人の態度が見て取れる。すなわち、母国からの独立を訴えて赤い十字を切り裂くエンディコットの行為は、先住民への蛮行を忘れようとする白人の試みとして浮かび上がる。このようにして、本作品における英米の対立は、白人と先住民、そして彼らに対するふるまいを正当化する姿勢を隠すのではないだろうか。

“The Birth-Mark”は、妻であるジョージアナの左頬にできている痣を取り除くための研究を続ける科学者を描いているが、先行研究では奴隷制廃止運動との関連が指摘されている。本研究では、肌の白さに拘泥する科学者エイルマーを、19世紀アメリカにおける白人至上主義から分析した。

エイルマーは、手の形をした痣に、ジョージアナと罪や嘆き、荒廃や死との深い関わりを読み取り、バースマークを恐ろしいものとして考えている。さらにこのマークを不完全の象徴として捉えるエイルマーは、彼女と顔を合わせるたびに、彼女が狼狽するほど視線を注ぐ。彼のこのような様子は、単に、白い肌を完成させたいという理想に燃えた科学者として解釈することはできない。多くの批評家が、エイルマーを偏狭な科学者として批判するゆえんは、不完全を治す能力が自分には備わっているという認識と、相手の意向をかえりみず、自分の正しさを信じてやまないという部分にあると指摘している。エイルマーのジョージアナに対する態度は、理想主義に偏った尊大な科学者であるという点から単純に分析することはできない。不安を示したジョージアナに対して、自分がいかに研究に時間を費やしてきたかを語り、だからこそ薬剤による痣の除去の実現性を確信していると主張する。この態度は、アンドリュー・ジャクソン大統領がインディアン強制移住法を施行した折に、当時の雑誌や新聞がその法律の正当性を訴えたことと共鳴しているように思われる。白い肌から痣を取り除くことに拘泥するエイルマーのうちに、19世紀初めごろの、先住民と白人の分離を目指す態度を読み解くことも可能である。19世紀前半の先住民をめぐる一連の政策や、インディアン問題の発端である、入植者と先住民の対立を考慮に入れることで、エイルマーが、インディアンを迫害する白人の象徴として浮かび上がる可能性を検証した。具体的には、1830年代に出版された新聞や雑誌の調査をもとに、当時のアメリカ先住民をめぐる言説がどのようなものであったかを検討し、本作品がいかにして作家の人種的態度を透かしているか明らかにした。

ホーソーンはいくつかの作品のなかで、インディアンと関わる史実やアメリカ先住民について述べているが、その方法は、これまで検討してきたように直接的なものではない。本研究が強調したいのは、先行研究で指摘されてきた、両義的な先住民表象とは異なるものであり、白人登場人物に焦点を当てることで明らかになる作家の人種意識である。ホーソーンは、先住民による白人一家の襲撃をモチーフに“*The Duston Family*”(1836)を執筆しているものの、その関心はインディアンではなく、彼らに残忍な復讐を果たす女性に向けられている。また、*The American Notebooks*において、ホーソーンは、インディアン虐殺の際に、先住民たちに子連れ去られた母親のエピソードについても言及している。白人親子は、いったん引き離されるものの、再会を果たしている。しかし、インディアンたちのあいだで長期間に亘り育てられた子供は、別離した母親と再会した後も、白人家庭になじむことができず、両者同意のうえで、子供はインディアンのコミュニティへ戻っている。さらに、死後出版作品である *Septimius Felton, or the Elixir of Life*(1838)には、白人とアメリカ先住民の混血キャラクターが登場する。このように、創作活動においてホーソーンが、入植以来続いた白人とアメリカ先住民の不和に関心がなかったとは言いきれない。本研究はインディアンの存在を強く意識しながらも、それをストレートに記すことは拒否する作家の姿勢を考えるうえで重要なと思われる白人キャラクターを分析した。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

④ 2015年9月19日 日本ナサニエル・ホーソーン協会東京支部9月例会 (於 専修大学) において、「ホーソーンとフロンティア・ライン——“The Gray Champion”における白人と先住民」について研究発表を行った。

④ 2015年11月21日 大学院英文学専攻課程協議会大49回研究発表会 (於 東北学院大学) において、「ホーソーンと十字架——“Endicott and the Red Cross”におけるアメリカ先住民表象」について研究発表を行った。

④ 2015年12月19日立教大学英米文学会 (於 立教大学) において、「ホーソーンとインディアン強制移住法——“The Birth-Mark”における人種の政治学」について研究発表を行った。